

井上光晴

mitsuharu nohe

神様入門

神様入門



井上光晴
mitsubaru inoue

文藝春秋

神様入門

昭和六十二年一月二十日 第一刷

定価一三〇〇円

著者 井上光晴

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 東京(二六五)一一二一一

印刷 精興社
製本 中島製本

*万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

©Mitsuharu Inoue 1987

Printed in Japan

ISBN 4-16-309360-5

神様入門〈目次〉

赤串怪談 5

十年精の売れなかつた日 57

日々の肉 113

神様入門 169

写真 装幀
瀬尾明男 菊地信義

神樣入門

赤串怪談

夕刻、棧橋に到着した最終便のフェリーから吐きだされた乗客のなかに、待ち望む人間はひとりもあらわれなかった。岸壁に屯する塩雲丹や蒲鉾売りの女たちの声がようやく切れ切れになったのをしおに、籠目浅吉は連れの男を促しもせず腰を上げた。駐車場脇の人だかりは、小一時間前に確かめた「包丁」(刃物売り)の香具師であったが、先程までの気持とは裏腹に、それさえも鬱陶しく感じられた。

一昨日の昼から数えて、幾度船着場に足を運んでいようか。そのたびに変事でも起ったような顔を隠そうとしない、親方の落胆を目の当りに、九造はおざなりの言葉を口にしようもなかった。小鯨を釣る人を赤い陽の影にした長い防波堤を、二人は黙りこくったまま歩いて行つた。九月一日正午という決めた日を明日に控えて、誰ひとり姿を見せぬことの意味を、浅吉はどうにもは

かりかねていた。

「蔵中や鯉町のやつら、企んでやがるんですよ。きっとそうだ」

「企む。何を。……」

袖幅のひろい白シャツに埋めた首を籠目浅吉はゆっくりと九造の方に向けた。

「いっぺんにどかんと、五人打ち揃ってがん首を並べる寸法とみましたがね、あたしは。出席、欠席の通知がひとつも返ってこないのが、何よりの証拠じゃないでしょうか。ひとり、二人とぼつぼつあらわれるよりその方がよっぽど親方がよろこびなされると踏んだでしょう。こいつは趣向だ。いやあ、そうだったのか、そうだと決まればこっちもゆっくり構えて、わかってましたよっていう具合に、連中の鼻をあかしてやらなくちゃ。……」

「朝方に着くフェリーはなかとぞ」

「昼過ぎの一時三十分。期日や時間にうるさい親方の気性を先刻承知の上で、巖流島の武蔵を氣取りたいってわけですよ。蔵中あたりの考えそうなこった」

浅吉の足どりに少しばかり弾みがついたのを見定めると、九造は渦の方角に首をのぼした。低い家並の陰から三味線の音がきこえてきたのだ。

「今夜、浜芝居がかかるとよ。ちょうど都合がよかったのにな」

九造の心中を見通したように浅吉はいった。都合とは、招いた客に見せたかったという意味だろう。

「浜芝居」

「知らないかね、九造は」

「ええ、初耳ですよ」

「そうか、見たことないのか。そいじゃ……」

いいかけた言葉を引込めると、浅吉はふふっと含み笑いをした。七十三歳とはとても見えぬ色艶のよい肌の内側に、明日をも知れぬ心臓の病いが潜んでいるとは信じ難い。招きに応じて与儀九造が一番乗りした一昨日の夜、湯を使う浅吉の間を捉えて、女房の継子があっさりとそういったのだ。

「大層な招集かけたと思うとなさるでしょうが、あの人の心積りは生きたまんまの葬式をやったかとよ」

「そんなに悪いんですか」

「あと一年か二年。本人はどうもそう決めとるみたい」

鉦とまじった三味線の囃子に似た旋律は、ふたたびかなり近づいてきこえ、コンクリートで固めた石垣に下駄の齒をかちんと鳴らして、浅吉は足を止めた。

「ひと昔前は懸賞でね、浜芝居の役者を抱いたもんだ。芝居がはねた後も、飲み方は夜明けまで続きよったから、それはもうありふれた騒動じゃなかった。……」

懸賞の中身をきこうとして九造が止めたのは、明日の不安が耳奥をかすめたのだ。みるみるう

ちに回復した浅吉の機嫌と引換えに、もしそうならなければという黒い網が心中にひろがる。

唐津一帯の香具師仲間を仕切る蔵中仲、久留米に住みながら九州一円を透視術と運命紙で稼ぐ鯉町重夫、羽犬塚を根城に殆ど全国を巡回する口石正行、ハブ油専門の備前進、大阪南のビジネスホテルに連絡場所をおき、主として山陰地方を商う田木義彦、佐世保でラーメン屋の女房になっている川島厚子。それに彼を加えて七人。

継子の言葉が事実なら「生きたまんまの葬式」を行おうとして、親方浅吉はいわば手塩にかけた身内を呼び集めたのである。こういう場合電話は使用されないのです、出席の有無を確かめようもなかったが、無断欠席などあらうはずもないという思いひとつに、九造は支えられていた。

浜芝居だという呼込みの一行は、ひと息入れるつもりか、二人の目の届く海辺に、暖竹の葉を日除けにして坐り込み、手拭を首筋に巻きつけた男が大きく背伸びをした。

「妙な世の中だね。テレビのおしんで恐山の靈媒紙が商売になってきたというただけん、風吹けばなんとかの類いさ。おれがもう少し若けりゃ一稼ぎするところたい」浅吉はいった。「鯉町がきたら教えてやろうと思うとるんだ。当分は恐山の時代だってよ。最上川も恐山も九州じゃおんなじようなものやからね」

「よろこびますよ、鯉町は」

「梃子入れ位、なんぼでもしてやるっていうてあるんだ。相談してくればいくらでも加勢してやる」と、なかなかいうことをききよらん」

「親方にはちょっと見せられないのじゃないのかな」

「どうして」

「親方の運命紙とじゃ太刀打ちできませんよ。そりゃ半分は親方の猿真似にしても、とても面目なくて、これで商売してるなんて、いえたもんじゃござんせんでしょう」

「そいけん、持っとるゲンバン（原板）譲ってやろうと思うとるんだ。いくら筑豊でも、鯉町の運命紙じゃ先の見えとるけんね」

風もないのにうねりはかなり大きく、赤錆の浮きでたテトラポットの陰から、紅白のひらひらをたなびかせる花輪を載せたモーター付きの小船が舳先を波打たせながらおどりだした。

「海の中で……」お祭でもやらかすつもりかといいかけて、九造は声のつづきを吞込む。

「阿古島で新しか船でもできたやろう」浅吉はいった。

「進水式でも、お寺さんでも、必要の時はみんな赤串に買いにくるとよ。森内の醤油屋に作って貰えば半分の費用ですむ」

醤油屋で花輪をつくるのか。しかしそれもまた九造はおもてにださなかった。

「今は醤油屋だが、元々提灯を作ったんだ。前の代が死んだ途端に火事が二度もでて、それから死んだ先代の女房が花輪をこさえるようになったとよ」

波間に見え隠れしながら、花輪を積んだ小船は次第に遠ざかって行き、不釣合な程の長い釣竿を夫々肩にした二人連れの少年が、埋立地の栈橋に立った。

「親方にお願ひがあるんですが、きいて貰えませんか」

「他人行儀の言葉を吐くじゃないか。いうてみればよかたい、何でも。おいにできることなら嫌とはいわんよ」

「場所柄もわきまえず、相すみません」九造は頭を下げた。「鯉町に譲ってもいいといわれるので決心がついたんです。話を横取りするつもりありませんが、鯉町は鯉町のこととして、あたしにも運命紙と霊媒紙のゲンパンを伝授していただくわけにはいかないものと、以前からそう願っておりました」

「運命紙をやるうというんかね、九造が。それとも仕切りに廻りたいのか」

「いえ、あたしがひとりです。もしできますなら、鯉町ともども、親方のゲンパンを使わせていただけなら、ありがたいと思ひまして」

「そりゃ、九造がやりたいというなら、おいもうれしかばってん……」

「鯉町の関係で、親方に迷惑はかけません。九州のうちに仕事をするつもりはないですし、関東より東という場割りで、如何なものでしょうか」

「花富士の紬（いかさま半分）の紬）はあんまりうまくいきやらんとね」

「そこそこにはいってます」九造はいった。「それでも、こんなことをいっちゃ何ですが、半端物を売のに飽きたのかもしれない。……勝手な言い草ばかり申し上げて……」

「半端物を売のに飽きたというなら、運命紙はもっと半端物じゃないのかい」

「あたしはそう思わないですよ」

「そりゃまた、どうして」

「きかれるとうまくいえないんですが、花富士の紬と運命紙は、何処か土台のところが違うんじゃないか。あたしはそう思います。形だけあって底抜けの反物と、しょっぱなから形のない気持ちだけ売る商いとは較べようもない。……冗談やでまかせを売れば同じかもしれませんが、本気で商いすれば少しは見えるのもでてこよう。それで、あたしは……」

「違うね、それは」浅吉は海面を見据えたまま、断定する口調でいった。「憎まれ口は最初にいうとした方がいいが、九造に運命紙は荷勝ちだな」

九造は黙っていた。言葉の何処が浅吉の氣に障ったのか。

「大牟田の病院で死んだ雪次郎をおぼえとるね」

「ええ、自動車事故で死んだ、大木雪次郎」

「あいつが死ぬ一年か二年前に、ちょうど今みたいなことをいいたとよ。運命紙や霊媒紙を商いの方便としてじゃのうして、もうひとつ別の目的でもあるように思い込もうとした。商売替えしろといえど商売替えして成功する者もたまにはおるし、雪次郎としてはだんだん自分の語りの力でそうなったとも考えたわけやね。運命なんていうのは、どっちみちいたずらみたいなものやから、右に行くか左か、二つに一つは当るとよ。それを忘れて、運命紙の文句とそれをつなぐ自分の語りがばあーんと当たったりすると、何かしら自分に別の力でも備わっとるかど錯覚し

てしまう。……雪次郎は何年、運命紙を売ったのかな。四年か五年目にちょうどそんなふうになって、まともな商売ができんようになってしまった。……まあききなさい。雪次郎は五年目にそうだったが、九造ははなから運命紙を間違うて考えとる。花富士の紬と運命紙は商いの土台が違う。さっき、そういうたろう。香具師の商売に土台もへちまもなかとよ。おれはそれをいうとる。……」

「まるっきりの……」

「まるっきりの、何だね」

「いいえ、親方のおっしゃることはよくわかりましたし、それはもう充分承知致しましたが、今ひとつおたずねしてもよろしいでしょうか」

「遠慮はいらんよ。引退してしもうたおいに、いちいち気兼ねすることはなかと」

「親方が赤串に帰られる前でしたから、昭和五十二年の秋口になりますかね。唐津に呼子、印通寺より壱岐に渡って対馬までお供をしたことがありましたでしょう。行く先々でどんなもてなしを受けたか、あたしはもうぼかんとしております。壱岐の筒城ヶ浜の近辺で、宿屋でもない漁師の家に泊めて貰って、その晩亭主や女子供まで二十人も集まりましたよね。ああこれは並の商いじゃないんだと思ったのはあの時です。商売はそっちのけで、親方は随分みんなの氣持をつかんでおいででした」

「そいけん、どうだというんね」浅吉は視線をそのままにして、体をゆすった。「持って行った